

五山文学で見られるグローバル化の始まり
ヴィート・ウルマン カレル大学

今回の発表では五山文学におけるグローバル化について少しお話ししたいと思う。五山文学は 13 世紀から 15 世紀にかけて五山制度に所属していた寺院の禅僧によって書かれた文学の名称である。特に臨済宗の禅僧が多かった。五山文学は漢文学であり、主に漢詩が作られた。

この中世日本の漢文学とグローバル化の関係を論じるのに、まず、グローバル化とは何かという問いには答えなければならない。様々な定義が存在しているが、今回はアンソニー・ギデンズの定義を例として挙げる。その定義によれば、グローバル化とは世界中の離れている場所を繋ぐ社会的な関係の激化である。しかし、このような定義に基づいて分析すれば、グローバル化は現在における過程だけではなく、古から同じようなプロセスがあったのではないであろうか。

国際貿易、あるいは国際交流のような現象はたった今現れたわけではない。中世の東アジアでもそのようなグローバル化を導く現象が著しく発達していた。ヨーロッパにも中東にも、東アジアにも国際的な組織が存在していた。特に同じ宗教で結ばれた人が国境を越えて一つの団体として活躍していた。ヨーロッパではそれはカトリック教会であった。中東ではイスラム教であり、東アジアの場合ではそれは仏教の様々な宗であった。中世日本では特に禅僧が国際交流において活躍していた。五山文学は禅僧の文学であるため、そのグローバル化へ導く過程の作用が著しく発達している。これから具体例を見て、グローバル化と結ばれている現象を分析する。

発表の時間が限られているので、何首かの漢詩しか例として挙げることはできない。だから、一首ずつ絶海中津、義堂周信、一休宗純らの詩人の作品を紹介する。

まずは、絶海中津(1334-1405)という禅僧の作品を分析する。絶海中津によって書かれた詩はほとんど全て中国を舞台にしている。その理由は彼の『蕉堅稿』という詩集には中国で書かれた物が納められているからである。日本で書かれた詩はほとんどない。絶海中津の漢詩には中国文化の要素と日本文化の要素がどのように一首の詩の中で納められており、共存することができているかを分析する。

次は、義堂周信(1325-1388)の詩を例として挙げる。義堂周信は絶海中津と違って中国で留学したことがない。義堂周信の膨大な『空華集』という詩集からはあくまでも日本的な主題を完全に中国文化の形式に沿って扱う漢詩を紹介する。

最後は、一休宗純(1394-1481)の七言絶句を例として挙げる。一休宗純は厳密に言えば、五山の僧侶ではないが、その以前の時代の五山文学との比較に役立つと思われる。中世日本でグローバル化が頂点に達した時代の後のそれに反する地域化の例として一休宗純の漢詩を解釈する。